

森鷗外・作 「山椒大夫」より抜粋

去年柴を刈った木立ちのほとりに来たので、厨子王は足を駐《とど》めた。「ねえさん。ここらで刈るので  
す」

「まあ、もっと高い所へ登ってみましようね」安寿は先に立つてずんずん登って行く。厨子王は訝《いぶ  
か》りながらついて行く。しばらくして雑木林よりはよほど高い、外山《とやま》の頂とも言うべき所に  
来た。

安寿はそこに立つて、南の方をじつと見ている。目は、石浦を経て由良の港に注ぐ大雲川の上流をたど  
つて、一里ばかり隔った川向いに、こんもりと茂った木立ちの中から、塔の尖《さき》の見える中山に止  
まった。そして「厨子王や」と弟を呼びかけた。「わたしが久しい前から考えごとをしていて、お前ともい  
つものように話をしないのを、変だと思っていたでしょうね。もうきょうは柴なんぞは刈らなくてもいい

から、わたしの言うことをよくお聞き。小萩は伊勢から売られて来たので、故郷からこの土地までの道を、わたしに話して聞かせたがね、あの中山を越して往けば、都がもう近いのだよ。筑紫へ往くのはむずかしいし、引き返して佐渡へ渡るのも、たやすいことではないけれど、都へはきつと往かれます。お母あさまとご一しよに岩代を出てから、わたしどもは恐ろしい人ばかり出逢ったが、人の運が開けるものなら、よい人に出逢わぬにも限りません。お前はこれから思いきつて、この土地を逃げ延びて、どうぞ都へ登っておくれ。神仏《かみほとけ》のお導きで、よい人にさえ出逢ったら、筑紫へお下りになったお父うさまのお身の上も知れよう。佐渡へお母あさまのお迎えに往くことも出来よう。籠や鎌は棄てておいて、かれいだけ持って往くのだよ」

厨子王は黙って聞いていたが、涙が頬《ほお》を伝って流れて来た。「そして、姉えさん、あなたはどうぞしようというのです」

「わたしのことは構わないで、お前一人であることを、わたしと一しよにするつもりでしておくれ。お父

うさまにもお目にかかり、お母あさまをも島からお連れ申した上で、わたしをたすけに来ておくれ」

「でもわたしがいなくなったら、あなたをひどい目に逢わせましょう」厨子王が心には烙印《やきいん》をせられた、恐ろしい夢が浮ぶ。

「それはいじめるかも知れないがね、わたしは我慢して見せます。金で買った婢《はしため》をあの人たちは殺しはしません。多分お前がいなくなったら、わたしを二人前働かせようとするでしょう。お前の教えてくれた木立ちの所で、わたしは柴をたくさん刈ります。六荷までは刈れないでも、四荷でも五荷でも刈りましょう。さあ、あそこまで降りて行って、籠や鎌をあそこに置いて、お前を籠へ送って上げよう」こう言つて安寿は先に立つて降りて行く。

厨子王はなんとも思い定めかねて、ぼんやりしてついで降りる。姉は今年十五になり、弟は十三になっているが、女は早くおとなびて、その上物に憑《つ》かれたように、聡《さと》く賢《さか》しくなっている。厨子王は姉の詞にそむくことが出来ぬのである。

第7回 青空文庫朗読コンテスト 一般の部 課題  
森鷗外・作「山椒大夫」より抜粋

底本：「日本の文学」3 森鷗外（二）中央公論社

1972（昭和47）年10月20日発行

入力：真先芳秋

校正：野口英司

1998年7月21日公開

2006年5月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。